

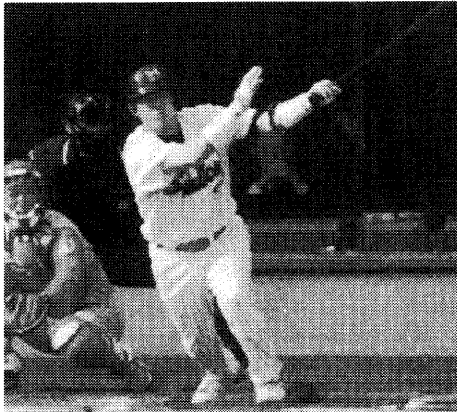
【体育科】

運動の楽しさを真剣に学ぶには

～ 機能的特性と子どもからみた特性の関係をさぐる ～

1 テーマ設定の理由

(1) はじめに



大学から社会人野球に入り、その後プロ入りした古田選手が2000本安打した。その偉大さは、選手としての記録だけでない。

今、日本のプロ野球界は大ピンチである。その理由はいくつかあるようだが、簡単にいうと、プロ野球界そのものの構造が現在に合わなくなっていると言われている。なにがなんでもジャイアンツという時代は終わった。その変革期に、我々と同じ目線で野球界をかえようとしている古田選手会長に世論はエールをおくり続けた。日本球界初のストライキをしたにも関わらず。それほど、プロ野球がつまらなくなりつつある。その流れに歯止めをかけようとしている選手代表が古田選手なのではないだろうか。2000本という安打記録だけではない、野球界発展に大きな功績を残そうとしているように感じる。

それでは、現在の学校や体育科のおかれている現状に目をやることにしよう。

体育は、運動そのものを学ぶ教科である。運動を学ぶとはどういうことなのだろうか。

学習指導要領では、『心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』を目標としている。その中で、究極的な目的は、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』ことである。今の社会は、生活するために必死で働いていた時代ではない。生活の中に余暇ができています。だから、物や資源の消費から、時間を消費することが産業になるともいわれています。我々は、余暇時間の使い方で自分の生活を豊かにしていけることを認識しなくていけない。そこで、学習指導要領にあるように、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』ための基礎的な力を培うことにつながるのである。

それでは、『楽しく明るい生活を営む態度を育てる。』ための基礎的な力とはいかなるものなのだろう。我々附属小学校体育部では、『運動に意欲的にかかわり、楽しさを充分味わうこと』であると考えている。昨今のゆとり教育への批判や、学力低下への危機意識から、基礎・基本の充実や見直しがなされようとしているのは周知の通りである。体育科でも、技能や体力の向上が基礎的な力であるという考え方がある。それを否定はしない。しかし、技能の向上は、楽しさを充分味わうための1つの大切な要素であると考えている。つまり、技能の向上が目的なのではなく、

より深い楽しさを味わうために必要となってくるのである。

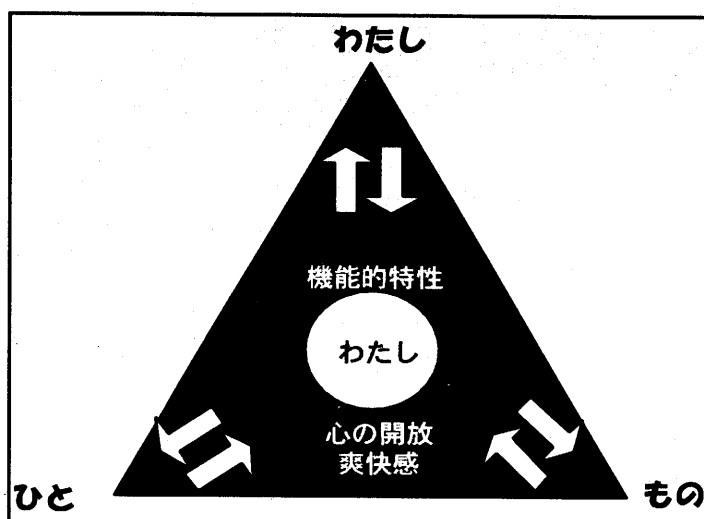
体育科は、運動との関わりを学習する教科である。わたしと運動との関係構築が主眼である。関係構築とは、運動の楽しさにふれることであり、運動の中に自分の感じる価値を見いだすことである。そこには「わたし」、「ひと」、「もの」との関係がある。(平成14年度本校紀要参照)

(2) めざす子どもの姿

学校提案でいっている「追求」から「追究」への変容とはいかなるものだろうか。

子どもたちは運動と出会ったとき、その子なりのおもいを持つ。「かっこいい。」「おもしろそうだ。」などといったプラスのおもいや、「いやだ。」「にがてだ。」というマイナスのおもいである。それを出発点にしていくのであるが、いつまでもはじめのおもいが続いていくということはない。

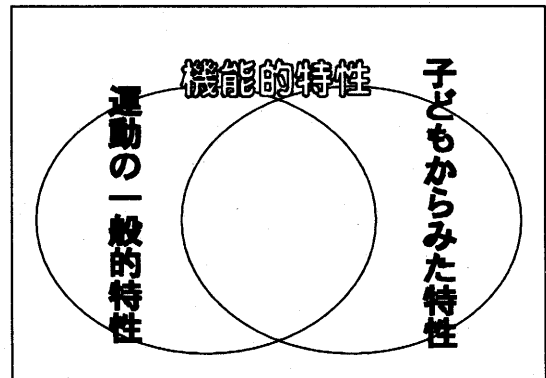
子どもたちは学習の中で、運動の楽しさにふれていく。それは、機能的特性を中心としたものである。運動の持っている楽しさというのは、心の解放感や体を動かす爽快感といったものから、人との関わりまで幅広い。しかし、学習の中心的な内容となると上記の通り、運動の機能的特性なのである。もともと本校の体育部では、機能的特性にふれた楽しさを味わわせることを学習内容としてきた。それは、機能的特性にふれたたのしさを味わうことに学習としての高まりがあるということである。つまり、機能的特性にふれた楽しさを味わおうとすると、子どもは運動を真剣に学ぼうとするのであって、本校が言うところの「追究」(本校学校提案参照)へ向かっているまなざしに変容していると考えた。だから、今年度は、「運動の楽しさを真剣に学には」というテーマを設定した。楽しさを真剣に学習するというのは一見そぐわな言葉が連なっているように感じられるかもしれないが、運動の楽しさ追究が基礎的な力となると考えたのである。



(3) サブテーマについて

昨年度、よりよく「競争」を学習させることをサブテーマにし、集団運動における『意味と内容』のひろがり』を検証していき、ある程度の成果(本校 紀要29集参照)がみられた。今年度は、それを個人運動にもひろげるように『機能的特性と子どもからみた特性との関係をさぐる』というサブテーマを設けた。

その運動特有楽しさである機能的特性は、大まかに言えば「競争」「克服」「達成」「模倣・変身」からなる。運動を学習するという事は、いかにすれば、「勝った」、「できた」、などの充実感・満足感を味わうかを、チームや個人で試行錯誤していくことである。しかし、その運動をクラスの子どもからみると、楽しさの中身や学習内容が多少かわってくる。筑波大学の佐伯先生は「50%のモデルと、50%のオリジナリティーがよりよい授業を構成する。」と常々からおっしゃっている。それは、自分のクラスの子どもたちにとって、その運動がもっている本来の価値とその子たちが学習可能な内容とのすり合わせや違いを明らかにしていくことだと考えた。その関係をしめしたものが右図である。



運動の一般的特性とはその運動固有の楽しさでありかわることはない。一方、子どもからみた特性は、地域性や学校・学級の特徴ができたり、先生と子どもとの関係でもかわって来たりする。それらをすりあわせせた（図では重なるの部分）運動を、子たちに出会わせていきたいと考えてた。

(4) 「意味と内容」がひろがる体育科の学び

《「意味と内容」とは》

跳び箱運動というのは、跳び箱という物的な障害を跳び越える爽快感を強く味わう運動であり、それのもつ「意味」は以下ようになる。

- ◇ 自分の跳べない高さを跳べるようにしていく。『克服』
- ◇ 跳べる高さで、跳び越し方を綺麗にしていく。『達成』

「克服」や「達成」は、跳び箱運動の魅力であり、学習の中心課題である。子どもたちは、それにふれるためにめあてをもち、達成しようとするのが「意味」なのである。「内容」というと、自分のめあてを達成するための方法であり、跳び箱運動の学習内容である。

《「意味と内容」がひろがる学び》

「跳び箱運動」での「意味と内容」がひろがる学びとは2つある。

- ◇ 友達の活動や学習の様子に触発されて自分の活動や学習がかわっていくこと。
- ◇ 学習は深まるにつれて、元々の「意味」から別の「意味」にかわっていくこと。

めあてを達成するための方法はその子固有の価値観に根ざしたものになる場合が多い。しかし、集団でおこなうことで、他の子の活動や学習の様子をみている。それがその子の学習に影響をあたえることがあるし、めあての解決方法が次の単元へつながることがある。それが一つ目の「意味」のひろがりだと考えた。また、学習がすすみ、真剣に取り組むことによって、友達と喜びを分かち合いたいと願ったり、一緒に活動したいと考えたりするようになる。それは、跳び箱を跳び越す楽しさから友達との関わり方という、違った「意味」にかわっていったと考えた。

2 体育学習でのまなざしの共鳴

(1) 昨年度の実践より

昨年度の研究会にソフトバレーボールをおこなった。その実践からである。

最初はボールをつなぐ練習をした。つなぐには、下に打つのではなく、上に打つ。交代が難しい。いきがあった。

調子がよくなかった。2 試合目に取り戻した。声はでない。声にこだわっているわけではないが親しみをもてたらいい。ぶつかったり、遠慮したりするから。

これは、着目児の作文を抜粋したものである。彼女は、勝つためにチームワークの大切さや、こえかけの大切さに気づいている。どちらかという、勝つためにというよりも、チームワークの大切さを言いたかったようだ。最初、彼女は勝つためにチームワークをよくしたいと考えていたようだが、バレーボールの特色であるつなぎあう楽しさに気づき、それをチームの子に呼びかけていった。それは、彼女自身のバレーボールにおける意味がかわってきたということではとみとったのである。それが、昨年度の「まなざしの共有」であった。しかし、今年は、その子の思いを他のチームの仲間がどう感じ、響きあったり磨きあったりしていくことわたしたちがみとっていかなければならなかったのである。

(2) まなざしの共鳴とは

子どもたちのまなざしの共鳴という、仲間の気持ちを知ることからはじまる。例えば、跳び箱運動で、どうしても跳びたいがなかなかうまくいかず消極的になりかかっている子がいるとしよう。跳び箱運動は個人運動だけれど、活動している場には友達が必ずいる。高学年になればめあてを決めるのも、友達関係に比重がかかることがよくある。だから、友達関係が大切になってくる。その子の思いに気づき、より積極的にサポートできたり、相乗効果で意欲が高まっていったりということがまなざしの共鳴だと考えた。

また、集団運動では、同じチームの子の思いを知ることが大切なのではないだろうか。この作文も昨年度の着目児の抜粋からである。

誰が打ったかという紙をもらった。試合がおわると「ふみ×」と書いていた。失敗している。みんなが「ドンマイ」と言ってくれた。

この子のように、自分に自信が持てなかったり、チームの中に居場所がなかったりする子にとっては、まわりの子のはげましや優しさが大きな力になっていく。それが、まなざしの共鳴だと考えた。